

新しい公園のかたち

公園は、散歩やスポーツ、イベントなど、さまざまな目的で利用されています。新たな時代に向けた公園のあり方について、長年公園づくりに携わってきた中村良夫さん、野中健司さんのお二人に話を伺いました。



▲どろんこクラブの活動風景

市内の公園にはそれぞれに個性があつて、多くの市民の皆さんに親しまれています。4年前に都市公園法が改正になり、これまでこの街にもあった同じような公園から、その地域の歴史や、そこに住んでいる人たちの思いをくんだ地域独自の公園が作れるようになりました。

約30年前、中村さんは古河公方公園の整備に携わり始め、公園内に飲食ができるレストランを作ろうと計画しました。今でこそ公園内にジェラテリアのようなおしゃれなカフェがあるのは当たり前の光景ですが、当時は規制が厳しく、県からの反対があつたそうです。現在では、利用者の要望に応じた公園づくりが進められるようになった、と中村さんは教えてくれました。

公園の役割は、単に美しい景色を鑑賞するだけの場所ではなく、その中でみんなで体を動かし、大地と触れ合うことも大切な要素です。公園の中で田んぼを作ったり、草花や昆虫などを調べたり、開催されるお祭りに参加したりすることで、公園が人と人をつなぎ付け、新しい人間関係を生む場所になると話してくれました。

野中さんも同じ考えを持っています。自分の好きな活動を通じて公園に関わることで、公園を大切にしようという思いが芽生え、将来に残せる公園として育っていくのだそうです。そういった活動を通じて「公園を使い込んであげること味が出て深みが増し、できた当初より価値が出る」のだと言います。



▲もりもりクラブの活動風景



左：中村良夫さん(東京工業大学名誉教授)
右：野中健司さん(古河公方公園パークマスター)

公園は誰に対しても開かれた場所ですが、お二人は、利用する人には自分たちの公園だという意識を強く持つて欲しいと話します。所有意識を持つことでより一層愛着がわき、それが郷土愛にも繋がっていくのです。

子どもの頃に公園で運動したり遊んだりした記憶というのは、大人になっても消えることはなく、ふるさとの思い出として残り続けていきます。今日より明日、明日より明後日と訪れる度に確実に魅力を増していく場所。公園にはそんな隠された力があると、お二人の話を聞いて感じることができました。

緑に包まれる古河公方公園
たくさんの木々や草花、野鳥
など、四季を通じて自然と文
化に親しめる公園です



ハナモモの季節が終わる頃、市内の至る所で木々が芽ぐみ、森が色づき始め、爽やかな新緑の季節がやってきます。

市内には261カ所の公園が存在し、中でも広い敷地を持つ「古河公方公園」「ネーブルパーク」「三和ふるさと森」は、特に市民の憩いの場として人気です。新緑に包まれた市内の公園では、子ども連れの家族や老夫婦、ペットを散歩する人など、多くの人でにぎわい、楽しそうな声が聞こえてきます。

それぞれの公園の魅力や公園に携わる人の思いを知り、自然豊かな公園で遊んだり、散歩したりして、自分ならではの楽しみ方を見つけてみませんか。

